

女子学生の海外服飾品の選択・購買行動について

○数金昭見* 飯田朝子** 笹本信子**

(*大妻女大人間生活科研, **大妻女大短大)

【目的】 我国の衣料事情は、1970年代までは資源を輸入して製品を輸出する典型的な加工貿易の形態をとり；それ以降は衣類の製品輸入に移行し、年々増加の一途をたどり、1995年では、全輸入総額の5.6%を占めるまでに至っている。この実態に着目して、それらを把握するために、ファッションに最も敏感な都市に通学する女子学生が、この製品輸入にどのように関与しているかをみることにした。

【方法】 東京および東京近郊から、都心女子大学に通学する18～24歳の女子学生 443名について、1996年11月に、各自が所持している輸入服飾品についてアンケート調査を行った。

【結果】 輸入服飾品の原産国では、第1位が「中国」、次いで「イタリア」、「アメリカ」の順である。衣類では、第1位が「セーター・カーディガン」、次いで「服飾小物類」、「バッグ」の順である。選択・購買行動の動機では、第1位が「デザインが良い」、次いで「必要性から」、「色彩的な好み」の順である。

以上のことから、都心に通学する女子学生は服飾に関する製品輸入については、生産国、縫製の良否、価格等よりも、むしろ「形態」、「色彩」という外観の視点から選択・購買が行われていることがみられた。